

## 原油を地中に留めること

### エクアドルの「ヤスニ IIT イニシアティヴ」と人類学のスケーリング

大杉高司（一橋大学大学院）

エクアドルのコレア（元）大統領は、2007年、アマゾン熱帯雨林のヤスニ国立公園（IIT 油田区）に埋蔵する8.46億バレルの原油を採掘「しない」ことに対して、国際社会からの補償を求めるヤスニ IIT イニシアティヴ（以下、ヤスニ）を提起した。ヤスニは、2010年に国連開発計画の後ろ盾をえて、同量の原油が消費された場合に排出される4.07億トンの二酸化炭素の国際取引価格、すなわち72億ドルの半額の拠出を、エクアドル政府が発行するCGY（ヤスニ保証債）と引き換えに求め、内外の高い関心を集めてきた。しかし、2013年にコレアは、拠出額がひとまずの目標額に達しなかったことを理由に、国際社会にむけた強い倫理的非難の言葉とともに、ヤスニの撤回を宣言するに至る。

ヤスニをその頓挫をふくめて分析する論考は多数あるが、本発表が着目するのは、ヤスニが提起する温暖化抑制の枠組みが、既存の排出権取引や、その延長上で模索されるREDD+（森林減少・劣化からの温室効果ガス排出削減）の枠組みと、重要な点で齟齬をきたしている点である。排出権取引は、化石燃料が既に採掘されたことを前提に、「事後」的に温暖化ガスの排出をコントロールしようとするものだが、ヤスニは原油が採掘・消費された場合に排出される温暖化ガスの取引価格を、「事前」に地中の原油の価値に繰り込もうとする。さらに、REDD+は温暖化ガス吸収源たる森林の劣化抑止・保全に取引可能な価値を繰り込むが、ヤスニとのあいだには地表（森林）と地中（埋蔵原油）のあいだのギャップがある。こうした国際的枠組みとの齟齬が、CGYの流通可能性を棄損し、その価値の下落を予期させ、さらにエクアドル政府がやがて採掘を再開するのではないかと不信を醸成してきたとの指摘がなされている。従来的人类学は総じて、こうした国際取引や取引性に対し「健全な懐疑」を示してきたものの、比較的小規模な周辺社会の在来実践知を外から抑圧・同化する暴力を批判する以外に語る言葉をもたなかった。本発表では、扱う対象の規模（スケール1）を国際取引レベルに照準し、そのうえで人類学が親しんできた現象を比較の物差し（スケール2）として活用できることを示したい（Strathern）。

ヤスニは、地中に原油を保持したまま、原油の消費が大気へ放出するはずの温暖化ガスの価値を取引しようとする点で、確かに既存の枠組みを逸脱している。しかし、これを保持と譲渡の二重化とみなせば、アネット・ウェイナーが「保持しつつ与えること」を贈与論の中核にすえて以来、人類学になじみ深い現象である。そこで明らかにされてきたのは、集団の同一性と密接に関わるために、たとえ他集団の手に渡ったとしても決して譲渡されることのない財＝聖物と、その

財の形代として譲渡される財が区別されることだった。この限りでは、長い間、国際資本の資源搾取を耐え忍んできた諸国において地中の鉱物が強くナショナリズムと結びつきフェティッシュ化される傾向があること、そしてCGYにどこでも流通可能な炭素クレジットとは異なる有徴性が刻まれていることは驚くべきことではない。さらに、財＝聖物が、私たちならば「（超）自然」と呼ぶ環世界からあらゆる事象に先だって「事前」に授けられたものであり、またその保持としかるべき取り扱いが環世界の更新・再生に寄与すると観念されていたことも重要である。この視角からは、ヤスニを先進諸国からの贈与（援助）の枠組みと見なし、そこに受贈者を劣位におく論理だけを読み取る思考は、不当なまでに一面的である。贈与するのは、むしろ、あらゆる市場取引あらゆる人間活動を基盤から支える自然＝環境を、世界に対して差し出すエクアドルであり、コレアの撤回以後も運動をつづける活動家たちの倫理的義憤を翻訳・理解する糸口も、ここにある。

民族誌上の「（超）自然」と排出権取引の時代の自然を比較することの正当性は、どのように確保されるだろうか。この点を考えるスケール2を与えてくれるのは、フェティッシュが駆動する表層と背後のダイナミズムに目を凝らすとするタウシグやラトゥールらだろう。「原油を地中に留めること」の価値は、先の36億ドルのみならず、多様な推計を生みだしてきた。伐採を免れる森林、他のエコシステム・サービス、生物多様性などなどを価値計算に算入するかどうかを巡って盛んに議論が交わされ、その貨幣換算総価値は256億ドルとも、328億ドルとも提示される。さらに「生態負債」の概念は時代をさかのぼって先進工業国の負債を膨れ上がらせ、「炭素予算」の概念は未来にわたる収支を現在に繰り込もうとしている。つまり、値札にどんな数値が書きこまれようとも、それは背後にあつて正確には把握できない超オブジェクト（Timothy Morton）の表層に浮かぶ仮初の代用物＝形代にすぎない。くわえて、IIT油田区に埋蔵する原油は世界の総消費量のわずか10日分にすぎず、温暖化ガスもまたラトゥールが独自の世俗政治神学によって先取りするGaiaのありようを想像するための、無数にある中のたった一つの手掛かりにすぎない。しかし、その何であるかが分からないGaiaは、市場取引をふくむ私たちのあらゆる活動を左右するuncannyな力を確かに発揮し始めている。ヤスニをめぐる地表と地中のギャップは、それ自体が表層となつて、私たちを巻き込みつつある幾重もの深み、決して飽和することのない全体を、その具体性において喚起している。

では、図と地を反転し、ヤスニを物差し＝スケールとして活用するとき、それは贈与やフェティッシュ、そして人類学知に、どのような新たな光を照らすだろうか。

キーワード：温暖化ガス、スケール、贈与、保持しつつ与えること、フェティッシュ